

## 工芸の意味とその変遷 No. 2

デザイン学科・工業デザイン研究室

飯 岡 正 麻

### Meaning of KOUGEI and Its Transition No.2

by Masao IIOKA

#### 1) はじめに

工芸という言葉に与えられた意味は、時代の変遷とともに変化してきた。明治の初め、工芸という言葉が使われ始めた時には、今日で言えば産業とか工業という意味であった。産業とは、生活のために生産することであり、社会における経済を支える生産を意味する。この産業は社会の発達の段階でことなり、今日においても、手と道具による生産が、産業の主要な部分を占める国や地域がある。明治の初め、日本もまだそのような状況にあったが、しかし、そこから抜け出そうとして、急速に工業化を推し進めようとしていた。そのような状況の中で、工芸という言葉が今日の産業と同意で使われたため、そこには二つの意味が含まれることになった。手と道具による伝統的な生産と、機械による近代的な工業生産である。

伝統的な手による生産も、更に二つの意味に分かれることになった。美術学校で工芸という名のもとに、美術として物を創るようになった人達があらわれ、そのような人達は、工芸が産業の分野として扱われることに飽き足らぬものを感じ始めていた。そこには、西洋から入ってきた純粋芸術という考えの影響があり、彼等には、芸術家として芸術作品を創りたいと言う欲求があった。生活での実用を目的とした産業としての生産は、経済活動の一部であるから、効率や機能が問題となり、職人として経済的に成り立つ量を、製品として生産せねばならない。作品としての、個性に基づいた美の表現を第一の目的とはしないからである。

やがて彼等は工芸を純粋芸術とし、自身は芸術家であることを表貌するようになる。

その一方で、工業化され、機械化されてゆくに従って、手と道具による生産は、主としてその生産量と価格の面において、産業としての意味を次第に失ってゆくことになる。工業化が進み、機械による大量生産が行われるようになると、産業工芸という言葉が使われるようになる。工芸が産業を意味していたとすれば意味の繰り返しになるが、この場合の工芸は、その手法を問わず実用品を作ると言う意味であり、その上に些かの装飾的、美的造形と云うことを含んでいるようである。そして産業という言葉に近代的な工業の意味を持たせている。この様な状況が、昭和に入って、展覧会や産業の場ではっきりと形になった表れてくるし、逆にそのような現実が、言葉の意味として反映されるのである。

本稿においては、前稿（九州産業大学芸術学部研究報告第22巻、工芸の意味とその変遷 No.1）に続き、昭和元年以後の工芸の意味を検証するために、いゝんな所で使われ、記録に残された工芸という言葉拾い上げて、それを編年的に並べることによって、その意味の変化を辿ろうとするものである。そのために出来るだけ原文を掲げ、意味の解釈は最少にとどめることにした。

#### 2) 芸術としての工芸

1926年 昭和1年

高村豊周 豊田勝秋 山崎覚太郎 松田権六等21

名によって、工芸集団（無型）が結成される。高村豊周によると、その会の性格は

「皆一人一人の主張を持っているが、其主張には必ず共通したものがあに違いない。しかしそこには、別に決まった型と言うものはない。いままでの工芸は類型的に何かによってつくった物が多かったが、我々の物は何にもよらない自分だけに依って創るのだ。つまり型が無い。無型ではどうかと思った。が無は不景気だから、同じ意味の无とした。」

と言うことであって、型に縛られず各人各様の姿態を自由に発揮することの意味であって、芸術への指向がみられる。何にもよらない、自分だけに依って創る、と言うことは種々の拘束からの完全なる自由という意味で、近代芸術の思想と軌を一にしている。

7月、日本工芸美術会結成が結成され、上野の美術館において第1回の「日本工芸美術展」を開催する。帝展と同じ会場で同じ会期である。帝展には摂政宮殿下が来られる。工芸美術展にも来てもらえるように運動をし、成功する。全て帝展に工芸部を設けるための運動である。

その檄文によると

「日本工芸会生る、目的は主として展覧会にあり。・・・鑑賞に値するものは、新古を合わせ西奇を容れて余すところなからんとす。・・・作家諸君は本会に於て、始めて自由に自己の真摯なる主張を（現代）に示すことを得べく、また（現代）は本会に依りて始めて工芸美術鑑賞の標準を定むる事を得ん。世人は今や異常なる期待を以て諸君の努力の結果を視んとす従って作家諸君の努力により今日もし全きを得ば即ち明日に於て工芸美術を絵画彫刻と鼎立せしめ得るに至るべく、・・・」

これによれば、自由な作家による、鑑賞を旨とす

る工芸を目指しており、絵画彫刻と鼎立しようと言うことであるから、工芸を芸術たらしめようとの意図がはっきりと表われている。大正15年、高村豊周が（工芸時代）創刊号の巻頭言として書いた文章と呼応するものである。

1927年 昭和2年

美術院会員会議で帝展4部として、工芸美術が創設されることになる。美術としての工芸がオーソライズされることにより、絵画、彫刻など既成の美術分野と、工芸の分野との格差が取り除かれ、工芸の芸術的地位が形式的に高まったことになる。

### 3) 産業としての工芸

昭和2年、商工省も予算に工芸指導所の創設費を計上し、産業としての工芸が、別の動きを明確にすることになる。文部省の範中の工芸と、商工省の範中の工芸とが、明確に分化を始めるのである。つまり、行政上における工芸の意味が二つに分かれたのであり、文部省は芸術の分野として、商工省は産業の分野として工芸政策を推進することになるのである。柳宗悦は「工芸の美」を著し

「美は用の現れである。用と美と結ばれるもの、これが工芸である。工芸に於て用の法則は即ち美の法則である。用を離れる限り、美は約束されておらぬ。実用を離れるならば、それは工芸ではなく美術である。用途への別離は工芸への決別である。その距離が隔たるほど、工芸の意義は死んでくる。」

と説く。用即美なのであって、用と美が別のものではないとする民芸論を展開することになる。

柳宗悦の民芸の考え方には、芸術家が作る純粋工芸に対する反発があるが、産業という概念は稀薄で、あくまでもその目的は美にある。美を目的

としながら、芸術家の自己表現、個性の表現という近代芸術の中心となる考えを否定するという点で、工芸あるいは美術に対する考え方の中で特異な位置を占める。

1928年 昭和3年

仙台に工芸指導所設立されたが、開設の告示で、時の商工大臣 中橋徳五郎は

「わが国在来の工芸的手工業制に対して、工業に関する最近の科学を応用利することを指導奨励し、其の製品を海外市場に輸出するに適當ならしむることは甚だ必要であり、且つ産業貿易の振興上効果多きものと言わねばなりません。我が工芸指導所なるものもひっきょう此の趣意精神に依りて設立されたものであります。」

と述べる。それは、工芸の世界に最新の技術や科学を応用して生産性を高め、外貨の獲得を行い、経済の活性化を行おうと言うものであった。伝統工芸と近代科学、技術の結合による新しい時代の生活用具の様式、生産技術、さらに輸出工芸の研究指導を業務とした。世界への輸出による外貨を獲得するためには、当時の日本では先端的技術ではまだ西欧に太刀打ち出来ず、伝統的工芸品の生産法を近代的技術に置き換えようとした。

型而工房を、倉田周忠を中心とし、その教え子である高等工芸の卒業生が結成した。

「型而工房は、生活を囲む建築・工芸製品に於て、我々の時代に対する意識的企図を有するものです。建築家・工芸家・製産家の立場に於て、科学的、経済的、生産的価値の合理化を実現せんがため、相互の分業的結合に依って、工房の仕事は始められたのです。型而工房は、室内工芸を中心として出来るだけ大量に、質実に、尚市場の生産を目標とするものです。」

昭和7年 型而工房が展示会を行う。その趣意書には、次のように書かれている。

「新しき大衆生活の構成は、無意味な封建生活の清算と現代科学の獲得によって組織されなければならない。型而工房はリアルな大衆生活に結び付いて、科学と経済によって吾々の時代の生活工芸の研究製作をなすものである。常にそれらは生活事象及び材料、構造の調査及び研究の結果と、市場とを結び付けた大量生産の具象化を目標とするものである。」

そこには、科学的思考と大量生産への指向が明確に示されている。生活工芸とはその上に成り立つものである。そこには伝統的手法、個性や芸術への指向は見られない。

1929年 昭和4年

工芸指導所から「工芸指導」刊行される。初代所長の国井喜太郎は、その巻頭言で次のように書く。

「工芸の生産ならびに経営上科学の基礎を必要とすることは、今更喋喋するまでもない事柄であるが、従来わが国の工芸かはこの点無関心であり、徒らに旧法を墨守し、進んで新規有効なる手段を生み出すことは勿論、他において既に用いられている材料や技術さえも容易に為さざる風があり、唯だ狭い天地に跼蹐しているものが多い有様であるのは、本邦工芸が産業的に振るわない一大原因である。」

徒に旧法を墨守し、というのは手工業のままであることを意味し、手段を工業化せねばならないことを強調している。

1931年 昭和6年

新興工芸が結成され形成され、豊口克平は

「大衆の経済的基礎の上に材料と構成と機能は十分に科学的に計画されていなければならない。在来の抹消的工芸操作は余りに大衆生活に明るさを持ち得ない時代である。」

と書き、伝統的工芸概念との決別を宣する。

日本民芸協 「工芸」 創刊

1932年 昭和7年

工芸指導所から工芸ニュースが創刊されるが、その英語名は Industrial art news であって、工業芸術が短縮されたのが工芸ということである。工芸ニュースは、伝統的な工芸やクラフトを視野に入れながらも、常に近代的な工業による生産の方向を見据えて行くことになる。

豊口克平 商工省工芸指導所技官となる。

「モヤモヤしていた日本の伝統の安直な近代化を考え直す根拠と機会を与えられ、はっきりと美術工芸との分離を決定的なものにした。」と記す。

1935年 昭和10年

大阪にて「産業工芸博覧会」開催される。そのスローガンは「工芸の工業化、工業品の工芸化」であった。「工芸品と並べて工具、発動機その他の工業製品を展示する。機械や工具類にたいして、その性能だけでなく外形や色彩の美しさが世間の話題になったのは、わが国では、この第一回産業工芸博覧会がはじめてであろう」、といはれる。

実在工芸美術会が結成される。帝展工芸部の審査や運営に不満を持ち「用即美」を旗印とする人達の集まりである。装飾過多の鑑賞用でしかない美術工芸に対して、生活のための工芸を目指し、実用にかなうことと美しさは不可分であるとする。以下結成に際しての檄文である。

「現代日本の工芸美術はその発達的一段階として、一度は免れがたい弊害、即ち表現の為の表現、装飾のための装飾という身動きの成らないスランプに陥っている。・・・大量生産と一品製作とを問わず、一の作品に於いては、用が美に寄留していることも、用と美が同居していることもいけな。用即美として一の絶対である時にのみそこに工芸的真がある。」

5月 第1回 実在工芸展が開催される。その時新聞に掲載された高村豊周の談話

「帝展工芸が床の間や応接間の飾り物だけでした。どの部屋にも用い得るものを探りたい。台所の道具にしても工芸の価値があればそれを認めよう。用途によって差別しない、工芸美の要素が具体化されていれば何でも構わない。だから産業工芸、機械工芸、民芸でもいいと言うのが我々の主張です。だから我々の主張に賛成する人は機械工芸家でも喜んで迎えるつもりです。」

商工省による輸出振興政策がとられる。

- 1, 海外に工芸調査員を派遣し外国の需要条件を調査し、外国の競争工芸品を収集させ、
- 2, 工芸指導所、(仙台・大阪)をして国内の工芸を調査・指導させ、
- 3, 国内・海外において輸出工芸展覧会を開催し、
- 4, 輸出工芸振興委員会を設置し、
- 5, 日本輸出工芸連合会を組織してニューヨークに直売機関を設立する。

1936年 昭和11年

日本工作文化連盟が「様式建築より生活建築へ、有閑工芸より目的工芸へ、低俗製品より価値製品へ」をうたって結成される。

1940年 昭和15年

戦時産業工芸展が開催される。

1944年 昭和19年

美術工芸に関わる展覧会全て中止される。

東京、京都の両高等工芸学校は工業専門学校となり、図案科を廃止する。

#### 4) 終戦後の動き

1945年 昭和20年 9月

工芸学会設立、産業工芸の復興始まる。

1946年 昭和21年

6月 工芸ニュースが復刊され、9月には「輸出向工芸品参考資料」が商工省貿易庁・商工省工芸指導所より編輯、発行された。その序文

「わが国の手工芸品は、古来伝統的技術と独特の意匠とをもって内には生活文化の主流をなしたり、外には輸出商品として海外に進出した。しかし乍ら、日本商品として海外市場にしるした足跡は粗悪低劣の故に功罪何れに帰すべきかは自明である。今や新生日本の途上にあたって、わが工芸産業は食料その他の必需物資の見返りとして再び大きくクローズアップされつつある。(中略) Made in Japan がその材料と技術と意匠の面に於て伝統有る国土性を近代的感覚と能率的生産過程によって新面目を発揮し以って日本的芸術の具体的表現として世界市場に信憑を博しわが国経済的地位の確乎たる地盤を築きあげることを念願するものである。」

1949年 昭和24年

工業技術庁 industrial design の訳を工業意匠と決定。

京都工芸繊維大学が 工芸学部、機織工芸、建築工芸、色染工芸、窯業工芸の4学科で発足する。工芸は工学とほとんど同意である。

東京美術学校、東京芸術大学となる。

東京教育大学発足。芸術系では絵画、構成、工芸が認可される。

11月5日 千葉大学開学式が挙行され、工芸学部、医学部、学芸学部、薬学部、園芸学部の5学部で発足。

1950年 昭和25年

文化財保護法が制定され(文部省管轄)文化財のうち有形文化財として美術工芸品が、要無形文化財 人間国宝として工芸技術が指定されることになる。

東京芸術大学、「工芸科を改組し、工芸科とデザイン科に分離し、デザイン科が設置された」

1951年 昭和26年

千葉大学が工芸学部を工学部と改称する。工芸学部を工学部に変更するその理由を、千葉大学工学部設置要項は次のように述べる。

「東京高等工芸が其創設以来今日まで主張してきたものは手工業という意味ではなく大量生産の工業を意味する。大量生産の工業という以上、いうまでもなく手工業でなく機械生産の工業である。しかして機械生産の工業である以上、あくまでも純工業的の性格を有するものでなければならぬ。」従って「この学部の性格は工芸的性格を有する工学部であって、工芸学部ではない」

東京芸術大学に工芸計画専攻が設けられる。

「産業工芸に関する技術並びに理論を総合的に教授し、産業的工芸指導者を養成することを目的とする」従来の工芸と一線を画して、今日的意味でのデザインを教えることを目指している。

1952年 昭和27年

日本インダストリアル・デザイナー協会が設立される。

この年、工芸指導所が産業工芸試験場となる。  
毎日産業デザイン賞設定される。

1953年 昭和28年

毎日新聞主催の「新日本工業デザイン展」開催される。その主旨は

「新日本の将来は優れた工業製品により輸出を振興し、自立の途を求める外にない。日本の工業製品が世界の信用を博するためには、品質の向上はもとより製品の機能と性能にふさわしい近代的デザインを絶対に必要とする。」

と書かれているが、これは工芸指導所の発足の時、中橋徳五郎が行った挨拶の中の、工芸をデザインに置き換えればほとんど同じである。産業としての工芸はデザインという言葉に置き換えられつつある。

1954年 昭和29年

京都工芸繊維大学が工芸学部に意匠工芸学科創設

「工業意匠に関する理論と技術を教授研究すると共に感覚的、情操的能力を進展させ、以てわが国産業文化の向上発展に寄与する」

1955年 昭和30年

人間国宝のうち工芸部門の保持者を中心に日本工芸会発足。以後 日本伝統工芸展を開催する。

「わが国には世界に卓絶せる工芸の伝統があります。伝統は生きて流れているもので、一瞬といえどもとどまることのないのが本来の姿です。伝統工芸は単に古いものを模倣し、従来を墨守することではありません。伝統こそ工芸の基礎になるもので、これをしっかり把握し、父祖から受け継いだ優れた技術を一層錬磨するとともに、今日の生活に即した新しいものを築き上げることが、われわれに課せられた責務だと信じます。

生活用品を作るために発達してきた伝統の技術を、極度に鍛練していくと、生活用具の形をしていても、鑑賞にたえる美術品ができるという考え。技術美が高度にたった場合、使うことから離れて鑑賞出来るものになる。」

東京芸術大学教授 前田泰次は「工芸概論」を著し工芸について次のように述べる。

現在われわれが普通に使っているような意味での工芸とは「美しさがある程度要求されている道具類」であって、「言葉にはその時代その時代の思想が含まれている。従って工芸という言葉のうちにも、時代の歴史が盛り込まれている。手練技巧を見せた道具類を工芸と考えたり、造形芸術の産業化を工芸化と考えたり、道具器物に美的装飾を施すのを工芸と考えたり、造形的な美しさを持つ広義の道具を作る人間活動を、すべて工芸と考えたりするのは、それぞれの歴史的背景があるわけである。その何れも一面の理があるから、どれか一つを正当と考えて、他を否定するのは余りに狭い考え方であろう。」

「貴族工芸に対して民衆工芸があり、一品工芸にたいして大量生産工芸が有り装飾的工芸に対して機能的工芸が有り、展覧会向け特殊工芸に対しては日常一般工芸がある。その何れもが工芸であり、その間に優劣は無い筈である。」

「人間が違い社会が違えば、互いに相反するよう

な工芸が現れても不思議ではない。またこのような広い工芸のうちから、技術の進歩につれて工業が独立して行こうとするのも当然である。」

工芸が持たされた多様な意味を整理し、各々が歴史的背景を持っている事を指摘している。

1956年 昭和31年

日本デザイナークラフトマン協会設立される。今日の日本クラフトデザイン協会（JCDA）である。

「クラフトデザインに関する知識及び経験の交流と促進とクラフトデザインの普及をはかることによってクラフトデザインの向上に資し、もって産業の発展と国民生活の文化的向上に寄与する事を目的とする。」

工芸という言葉の中にある伝統性、手わざ、自然に対する感性などを重要視しながらも、現実の生活からの遊離することに対する反省があったといわれる。その結果、工芸という言葉を使わず、現代性、いまの生活に使われるものを強調するために、クラフトという英語を使ったのと思われる。

1957年 昭和32年

Gマーク制度発足。事務局は特許庁意匠課

1958年 昭和33年

通産省に通商局振興部デザイン課設置

1960年 昭和35年

クラフトセンタージャパン創立 勝見勝 前川国男 佐藤潤四郎 吉田丈夫 加藤達美 渡辺力司忠（丸善社長）が最初のメンバーであり、まずは次のような活動をする。

輸出政策に沿って、日本各地に残る伝統的産業

工芸の再活性化を企てる。

地場産業の製品の中から現代の生活に適合する工芸品を選出、丸善に展示し流通の促進に寄与する。

センターの活動の主旨の宣伝、クラフトに対する啓蒙を目的として機関誌（クラフト）を発行する。

日展系一品製作である美術工芸作家への反発と、民芸にたいしては泥臭さ、後進性の上にとった趣味性や装飾性を追っている姿にあきたらない人の集まりである。

##### 5) 産業としての意味のそう失・純粹芸術への傾斜

1961年 昭和36年

日本現代工芸美術協会設立され翌1962年、第一回展開催。芸術としての工芸の高揚をはかる。

「然し工芸の本義は作家のイリュージョンを基幹として所謂工芸素材を駆使し、その造形効果による独特の美の表現をなすもので、その製作形式の立体的と平面的たるとを問わず工芸美を追求することにある。（使える工芸）という文字は長い間の道具の説明でしかなかったのである。現代の工芸は又新しい解釈を要求する。」

使える工芸を否定して、純粹工芸こそ時代に即した工芸としている。

1964年 昭和39年

美術手帳 4月増刊号 「工芸の美」水尾比呂志

「工芸品は、常に実用という性質を第一義的なものとして持っている。何かのための道具であり、容器であることを目的に造られるのがその宿命であって、目的不明、用途不明の工芸品はあり得ないし、万一そういうものが造られたとしても、私

たちはそういうものを工芸品と呼ばない。(中略) 実用性は工芸品の生命のすべてであり、至上の鉄則である。人間はなまじっか美とか個性とかが判るようになって、工芸品に気の毒なことをした。工芸品は実用品としてだけ造られたかったのに、美的要素だとか、美と実用を兼ねた性質だとか、あるいは作家の個性表現だとかのよけいな荷物を背負わされて、自分でも自分を見失い、よろめいた。」

工芸の第一義として用を挙げる民芸の立場からしても、既に時代の推移の中で、その中から用が失われ、美を目的とせざるを得ない状態になりつつあることを、自分からが表明せざるを得ないのである。

1965年 昭和40年

「日本美術工芸」316号 において前田泰次は、時代における工芸の意義を述べる。

工芸は次の役割を現代社会で果たしていることになる。

- 1, 機械製品では出せない潤いのある生活用具を主として手で作り出すこと (機械も一部利用する事もある)
- 2, 機械で作るよりも、手で作る方が、経済的にも適しているものを、主として手で作ること。
- 3, 鑑賞するものを手で作り、その手技がもたらす手練の美や造形美を楽しむこと。
- 4, 自分自身が手で物を作り、製作活動それ自体を楽しみ、製作品を生活用具とすること。

既に産業としての意味が失われていることがはっきりしている。そこに残されるのは、美であり趣味的な活動である。

1968年 昭和42年

産業工芸試験所は、製品科学研究所とその名を変え。昭和3年に工芸指導所が設立されて以来、

行政の中である位置を占めてきた、産業としての工芸という認識がその中から消えたものと考えられる。

1975年 昭和49年

伝統的工芸品産業の振興に関する法律が制定される (通産省管轄)

- 1, それは、日常生活に使われるもの、冠婚葬祭や節句などに使われるものでも、日本人の生活に密着している物を含む
- 2, 殆ど手作業で製造されるもの
- 3, 伝統的な技術屋技法によって製造されるもの  
この場合伝統とは100年以上が基準
- 4, 伝統的に使用されてきた原材料を使っているもの  
既に無い材料, 入手しにくい材料については、持ち味を変えない範囲で他材料を使うことが認められる
- 5, 一定の地域に生産者が集まっていること  
10企業以上又輪30人以上の従事者がいて、いわゆる産地を形成していること

通産行政の中で工芸という名が復活することになったが、ここでの工芸は、個人を対象としないと言う意味で産業ではあっても、伝統的のものに限定されており、ある意味での保護の対象となるのであって、このことは、放置すればせっかくの文化、人間が作り出し育て伝えてきたものが減ぶかも知れない、そのテコ入れとして振興策をとろうと言うのであろう。ただ、個人の有する技能、それによる作品として捉えると、文化行政の中に入り、通産のテリトリーから離れてしまう。だからこそ産業として把握せねばならないのであろうが、ここでは文化性、伝統性が重要視されており、芸術性も産業としての意味も一義的には要求されていない。

今日の工芸という言葉には、産業的意味は既にないといってよかろう。これまでその様な意味で、



工芸とか産業工芸とか呼ばれていたものの大部分が、デザインという言葉の中に吸収されてしまっている。工芸という言葉に今も残された意味は、伝統に立つ技法によって作られる文化財的なもの、或はそれが個人の技能に行き着くことの延長線上にある、個性の表現としての芸術表現をするもの、ということになる。

### 参 考 文 献

出原栄一 「日本のデザイン運動」 ペリカン社 1989  
工芸財団編 「日本の近代デザイン運動史」 ペリカン社

1990

グループ5編 「型而工房から」 美術出版社 1987  
前田泰次 「工芸概論」 東京堂出版 1955  
柳宗悦 「民芸」 創元社 1941  
水尾比呂志 「美の終焉」 筑磨書房 1968  
千葉大学同窓会監修 「千葉大学工学部六十年史」  
教育文化出版 1983  
東京美術学校編 「東京芸術大学百年史」ぎょうせい  
1987  
京都工芸繊維大学工芸学部80周年記念事業委員会編  
「工芸学部80年」 1983